

大学生の対人関係認知と学校享受感およびストレス反応との関連

— 部・サークル活動への参加に着目して —

藤原 正 光 (文教大学教育学部)

田 辺 千 草 (埼玉県・加須市立騎西保育所)

The Relation between Recognition by University Students of Personal Relationships and their Enjoyment of Attending School and Stress Reaction
-Focus on Participation in Club and Circle Activities-

FUJIHARA MASAMITSU, TANABE CHIGUSA

(Faculty of Education, Bunkyo University)
(Kisai West Nursery School, Kazo-City)

要 旨

大学生293名を対象に、部・サークルへの所属系列（体育会、文化会、体育会系サークル、文化会サークル）と、友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感とストレス反応との関連を、性差を考慮しながら質問紙法による検討を行った。1) 所属系列間で、友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感、ストレス反応に有意な差は見られなかったが、無所属はいずれの従属変数にもネガティブな傾向を示していた。2) 性差は、友だちへの好意度についてのみ、女性の方が高い傾向が伺えた。3) 友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感には正の相関が、いずれの変数もストレス反応とは負の相関にあることが示された。重回帰分析の結果、友だちへの好意度と教師への好意度は、学校享受感に有意に影響を及ぼし、学校享受感が高まればストレス反応は減少する関係にあることが確認された。

キーワード：友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感、ストレス反応、重回帰分析

問題と目的

大学生生活において、部やサークルにおける活動は、対人関係を通しての人間形成や精神衛生の点でも重要な役割を果たしている。

渡邊・高橋（2002）は教育学部生を対象にサークル所属の実態調査を行い、サークル所属の理由として「その活動が好き」（9割以上）、良かったこととしてほぼ全員が「友だちができたこと」をあげている。大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向に関する新井・松井（2003）の論文では、サークルへの入部動機の研究結果は「親しい仲間ができる」「自分の趣味や感性に合っている」「いろいろな経験がしたい」の3つの選択肢が最も多く解答されたと報告している。また、

橋詰・高城（1995）は、学生生活の充実とサークル集団への所属状況との関連を分析し、サークルに現在所属している者は充実感が高く、退部者と現在所属していない者は充実感が低いことを明らかにしている。

このように、部・サークルへの所属は、仲間づくりを通して好ましい対人関係の発達に貢献しているといえよう。しかし、無所属者や部・サークルの活動に積極的に参加していない学生の対人関係を実証的に検討する必要性が残る。

松尾・佐藤（2003）は、大学生の対人関係認知およびストレス反応と学校享受感との関連を質問紙法により検討し、1) 教師関係認知では、女性の方が教師との関係は良好で

あり、2) 学校享受感は、20歳以上の女性は20歳未満の女性や男性よりも低い、3) ストレス反応の「不機嫌・怒り」因子のみが、学校享受感とマイナスに関連している、と報告している。

ストレス反応について、三浦ら(1995)は中学生の学校ストレスとストレス反応との関連を検討し、ストレス反応として「身体反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の4因子からなる下位尺度を提案している。また、煙山(2013)は、女子スポーツ選手を対象にスポーツ選手用ストレス尺度を開発し、「身体的疲労感」「無気力感」「不機嫌・怒り」「対人不信感」「抑うつ」の5因子を抽出し、クロンバックの α 係数は.870~.874の高い内的整合性をもっている、と報告している。

本研究では、友人への関係認知を「友だちへの好意度」、教師との関係認知を「教師への好意度」として、学校享受感およびストレス反応との関連を、次の作業仮説に基づいて検証することを主な目的とした。

1) 部・サークルの所属系列(体育会, 文化会, 体育会系サークル, 文化会系サークル)と友だちへの好意度, 教師への好意度, 学校享受感, ストレス反応の関連を検討する。また, 無所属及び部・サークル活動への消極的参加者(低群)との関係も検討する。

2) ストレス反応の下位尺度である「不機嫌・怒り」「無気力」「抑うつ・不安」「身体反応」の妥当性について検討する。

3) ストレス反応との関係を, 友だちへの好意度(高群・低群), 教師への好意度(高群・低群), 学校享受感(高群・低群)とに分けて検討する。また, ストレス反応のメカニズムについて, 友だちへの好意度, 教師への好意度, 学校享受感から検討する。

4) 性差要因を, 友だちへの好意度, 教師への好意度, 学校享受感, ストレス反応について検討する。

研究方法

調査対象者 首都圏の私立大学生293名を対象に、質問紙法による調査を実施した。男女別、部活・サークル別の所属者を表1に示した。調査対象の大学では、体育会と文化会は大学公認の部活動であり、体育会系と文化会系はサークル(届出団体)と位置づけられている。

	体育会	文化会	体育会系	文化会系	無所属	計
女性	23	49	73	22	23	190
男性	32	11	40	1	19	103
計	55	60	113	23	42	293

調査内容 フェイス項目は、①性別、②部・サークルの所属、③部・サークルへの参加の度合い、であった。部・サークルへの参加度は、5件法(1:全く参加しない~5:自主練もする)で尋ねた(表2参照)。

友だちとの関係(6項目)は、普段よく話し合っている友だち2~3名をイメージしてもらい、項目①~項目④は5件法で求め「友人への好意度」とした(表3参照)。さらに、項目⑤友だちと合っている度合い(1:週に0~1回~5:ほぼ毎日)、項目6)連絡の度合い(1:週に0~1回未満~5:ほぼ毎日)を尋ねた。

教師との関係(5項目)は、普段からよく接している教師1名をイメージしてもらい、友だちとの関係とほぼ同じ(友人を教師に置き換えて)質問項目を作成し、項目①~項目④を「教師への好意度」(表6参照)とした。項目⑤は教師と合っている度合い(1:月に0~1回未満~5:月に10回以上)を尋ねた。

学校享受感(12項目)は、古市(1991)と松尾ら(2003)を参考に大学生向けに修正した(表7参照)。回答方法は5件法(1:全く当てはまらない~5:とてもあてはまる)であった。

ストレス反応尺度(38項目)は、三浦ら(1995)および松尾(2003)の尺度を基に大

表2 部・サークルの所属別参加頻度と残差分析のクロス表

		全く参加しない	あまり参加しない	不定期に参加	必ず参加	自主練もする	計
体育会	頻度	0	0	1	26	28	55
	%	0.0	0.0	1.8	47.3	50.9	
	調整済残差	-3.6	-1.9	-4.8	4.6(**)	4.5(**)	
文化会	頻度	1	1	14	18	26	60
	%	1.7	1.7	23.3	30.0	43.3	
	調整済残差	-3.5	-1.4	-1	1.3	3.3(**)	
体育会系	頻度	3	13	60	22	15	113
	%	2.7	11.5	53.1	19.5	13.3	
	調整済残差	-5	3.9(**)	7.5(**)	-1.3	-4.1	
文化会系	頻度	2	1	8	3	9	23
	%	8.70	4.30	34.80	13.00	39.10	
	調整済残差	-1	-0.2	0.7	-1.2	1.4	
無所属	頻度	42	0	0	0	0	42
	%	100	0	0	0	0	
	調整済残差	15.8(**)	-1.6	-4.4	-3.9	-4.2	
計	頻度	48	15	83	69	78	293
	%	16.4	5.1	28.3	23.5	26.6	

(**): p<.001

表3 友だちとの関係尺度の因子分析結果(主因子法 プロマックス回転)

因子・友だちへの好意度 ($\alpha = .856$)	頻度	平均値	標準偏差	共通性
1) 友だちと楽しく活動できますか	293	4.40	0.76	0.529
2) あなたに対する友だちの態度をどのように感じますか	293	4.35	0.85	0.523
3) あなたは友だちをどう思っていますか	293	4.60	0.64	0.534
4) あなたは、友だちがあなたのことをどう思っていると感じますか	293	3.95	0.79	0.422
因子の寄与率				70.43%

学生向けに修正し、①身体反応(10項目)、②抑うつ・不安(9項目)、③不機嫌・怒り(9項目)、④無気力(10項目)であった(表10参照)。回答方法は5件法(1:全く当てはまらない～5:とてもあてはまる)であった。調査手続き 質問紙への回答は、授業終了後に実施しその場で回収する方法と、休み時間を実施する方法であった。回答方法はすべて自記式であった。

調査時期 2012年10月と2013年7月であった。

結果と考察

1. 部・サークル活動の所属と性差が友だちとの関係認知、教師との関係認知、学校享受感に及ぼす効果

1) 部・サークル活動の所属と参加度

部・サークルへの参加度を所属別にクロス

表で示した(表2参照)。全体では $\chi^2(16) = 340.85$ であり $p < .001$ で有意であった。残差分析の結果、体育会は「必ず参加」(47.3%)「自主練もする」(50.9%)が $p < .001$ で有意であり、文化会も「自主練もする」(43.3%)と有意に多かった。一方、体育会系は「あまり参加しない」(11.5%)「不定期の参加」(53.1%)と有意に低い参加を示していた。

体育会と文化会は、ほとんど学生連盟に所属しており、個人成績や大学間の競争が求められている。一方、体育会系・文化系サークルは、学生生活を楽しむことを主目的にしており、サークル活動への参加はかなり自由であることが反映されている。

2) 部・サークルへの所属と友人との関係認知

友だちとの関係尺度(4項目)を因子分析

(主因子法 プロマックス回転)した結果、単因子構造が確認され、「友だちへの好意度」とした(表3参照)。さらに、友だち関係尺度(4項目)を合計し、1項目あたりの値に変換して「友だち好意度得点」とした。

(1) 部・サークルへの所属別の友だちへの好意度

友だちへの好意度の平均値を部・サークルの所属別に検討した(表4参照)。Tukey HSDによる多重比較の結果、体育会系(4.45)・文化会(4.39)・体育会(4.31) > 無所属(3.93)の関係が $p < .05$ で有意に、および文化会系(4.33) > 無所属(3.93)の関係が $.05 < p < .10$ で有意に近いことが示された。

無所属学生の「友だちへの好意度」が相対的に低い結果は、学校内での希薄な友だち関係を意味している。学校への享受度と合わせて検討する必要がある。

	頻度	平均値	標準偏差
体育会	55	4.31	0.57
文化会	60	4.39	0.65
体育会系	113	4.45	0.54
文化会系	23	4.33	0.51
無所属	42	3.93	0.89

(2) 友達への好意度の性差

友だちへの好意度の平均値は、女性(4.38 SD.63) > 男性(4.23 SD.67)の関係が、 $0.05 < p < .10$ で有意に近い関係にあった。

したがって、女性の方が友だちへ好意度は高く、より親密な交友関係を展開していることが予想される。

(3) 友だちと会う頻度と友だちに連絡する頻度との関係

友だちに会う頻度と連絡する頻度との関係を表5に示した。会う頻度の「毎日～週4・5

回」が74.7%であり、連絡する頻度の「毎日～週4・5回」は46.1%である。また、会う頻度と連絡する頻度の相関係数は $r = .274$ であり、 $p < .001$ で有意な相関を示していた。

好意度を高める友だち関係は、「会うこと」と「連絡すること」の両方が重要な役割を果たしているといえよう。

3) 部・サークルへの所属と教師との関係認知

教師との関係尺度(4項目)を因子分析(主因子法 プロマックス回転)した結果、単因子構造が確認され、「教師への好意度」とした(表6参照)。さらに、教師関係尺度(4項目)を合計し、1項目あたりの値に変換して「教師好意度得点」とし、結果の分析の測度とした。

	会う頻度		連絡する頻度	
	頻度	%	頻度	%
1週間0回	5	1.7	32	10.9
週1回	13	4.4	25	8.5
週2・3回	56	19.1	101	34.5
週4・5回	73	24.9	74	25.3
毎日	146	49.8	81	20.8
計	293		293	

(1) 部・サークル所属別の教師への好意度

教師への好意度の平均値を部・サークルの所属別に検討した。文化会(3.48 SD.62)、体育会系(3.41 SD.67)、体育会(3.40 SD.68)、文化会系(3.24 SD.50)、無所属(3.30 SD.65)であり、Tukey HSDの多重比較の結果、部・サークル所属系列間に有意差はなかった。

(2) 教師への好意度と性差

教師への好意度の平均値は、女性(3.38 SD.61)、男性(3.41 SD.73)であり、有意差は

因子・教師への好意度 ($\alpha = .858$)	頻度	平均値	標準偏差	共通性
1) その教師と楽しく活動できていますか	293	3.29	0.89	0.484
2) あなたに対するその教師の態度をどう感じますか	293	3.49	0.78	0.571
3) あなたはその教師をどう思っていますか	293	3.57	0.80	0.586
4) あなたは、教師があなたのことをどう思っていると感じますか	293	3.22	0.63	0.435
因子の寄与率				70.78%

表7 学校享受感尺度の因子分析結果(主因子法 プロマックス回転)

因子・学校享受感 ($\alpha = .897$)	頻度	平均値	標準偏差	共通性
1) 学校へ行くのが楽しみだ	289	3.74	0.98	0.665
2) 学校は楽しくて、1日があつという間に過ぎる	289	3.38	1.05	0.659
3) 学校は楽しいので、少しくらい調子が悪くても行きたい	289	3.04	1.16	0.432
4) 学校は楽しいことがたくさんある	289	3.82	1.03	0.634
5) 授業が終わったら、すぐ家に帰りたい(逆)	289	3.49	1.08	0.411
6) 学校がなければ、毎日がつまらない	289	3.76	1.12	0.363
8) いつまでもこの学校にいたい	289	3.43	1.20	0.506
9) 学校では嫌なことばかりある(逆)	289	4.06	0.96	0.304
10) 私はこの学校が好きだ	289	3.94	1.02	0.598
因子の寄与率				56.05%

認められなかった。

4) 部・サークルへの所属と学校享受感

学校享受感の尺度(12項目)は、因子分析(主因子法 プロマックス回転)の結果、共通性が.300未満の3項目を分析の対象から削除し9項目とし、再度同様の方法で因子分析を実施し単因子構造であることを確認した(表7参照)。学校享受感尺度を合計し、1項目あたりの値に変換して「学校享受感得点」とした。

表8 所属系列別の学校享受感の平均値

	頻度	平均値	標準偏差
体育会	55	3.68	0.74
文化会	58	3.77	0.66
体育会系	111	3.70	0.80
文化会系	23	3.60	0.65
無所属	42	3.19	0.92
計	289	3.63	0.79

(1) 部・サークルへの所属と学校享受感
部・サークルへの所属別に学校享受感得点を算出した(表8参照)。Tukey HSDの多重比較の結果、文化会(3.77)・体育会系(3.70)・体育会(3.68) > 無所属(3.19)が $p < .05$ で有意であった。

さらに、部・サークル活動への所属(274名)と無所属(42名)に分割して学校享受感との関係を検討した。学校享受感の平均値は、所属群(3.70 SD.92) > 無所属群(3.19 SD.92)の関係が $p < .001$ で有意であった。

部活・サークルへの参加度を高群(4:必ず参加, 5:自主練集)と低群(1:非参加

~3:不定期に参加)に分割して学校享受感の平均値を検討した。結果は、低群(3.51 SD.84) < 高群(3.75 SD.72)の関係が $p < .01$ で有意であった。

したがって、無所属の学生や部・サークル活動に積極的に参加しない学生は、いずれも学校享受感が低く、学校適応の問題を検討する必要性を感じる。

(2) 友だちへの好意度と教師への好意度が学校享受感に及ぼす効果

友だちへの好意度を中央値(4.00)で高・低群に分割し、教師への好意度も中央値(3.50)で高・低群に分割し、学校享受感を従属変数として分析した。(表9参照)。

表9 友だちへの好意度・教師への好意度と学校享受感の平均値

		頻度	平均値	標準偏差	t値	有意確率
友だちへの好意度 (中央値:4.50)	低群	124	3.21	0.71	8.690	0.000
	高群	165	3.94	0.71		
教師への好意度 (中央値:3.50)	低群	140	3.43	0.80	4.383	0.000
	高群	149	3.82	0.73		

友だちへの好意度(高・低)の学校享受感は、低群(3.21) < 高群(3.94)が $p < .001$ で有意であった。同様に、教師への好意度(高・低)の学校享受感は、低群(3.43) < 高群(3.82)が $p < .001$ で有意であった。

学校生活が楽しく満足であると感じる学校享受感、好ましい友だち関係認知や教師関係認知が強く関連していることが確認された。

(3) 学校享受感と性差

学校享受感の平均値は、女性(3.67 SD.77)、男性(3.56 SD.82)であり有意の性差

表10 ストレス反応尺度の因子分析結果(主因子法 プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性	平均値	標準偏差
因子1 不機嫌・怒り (9項目 α=.930)							
20) 怒りを感じている	0.905	0.514	0.621	0.539	0.846	1.98	1.18
19) 腹立たしい気分だ	0.897	0.524	0.640	0.508	0.841	2.06	1.21
21) 不愉快な気分だ	0.856	0.565	0.669	0.543	0.744	2.14	1.27
18) 気分がむしゃくしゃしている	0.809	0.591	0.723	0.556	0.780	2.38	1.35
22) 誰かに怒りをぶっつけたい	0.736	0.435	0.539	0.435	0.606	1.80	1.09
23) しゃべりたくない	0.723	0.572	0.560	0.546	0.717	2.14	1.33
17) いららする	0.721	0.586	0.613	0.472	0.698	2.65	1.38
32) 誰にも会いたくない	0.698	0.535	0.525	0.534	0.684	1.90	1.14
31) 何も食べたくない	0.575	0.394	0.414	0.556	0.462	1.66	1.07
因子2 無気力 (7項目 α=.916)							
25) 何もしたくない	0.560	0.821	0.604	0.580	0.718	2.69	1.42
26) 1つのことに集中できない	0.494	0.792	0.509	0.479	0.641	2.70	1.39
30) 頭の回転が鈍く、考えがまとまらない	0.517	0.788	0.645	0.583	0.693	2.68	1.35
29) 身体から力が湧いてこない	0.583	0.784	0.578	0.596	0.661	2.56	1.35
24) 根気がない	0.549	0.778	0.578	0.491	0.632	2.54	1.37
27) 勉強が手につかない	0.406	0.754	0.485	0.339	0.585	3.00	1.36
28) 難しいことが考えられない	0.442	0.707	0.497	0.456	0.586	2.74	1.33
因子3 抑うつ (8項目 α=.939)							
13) 悲しい	0.682	0.572	0.901	0.550	0.662	1.96	1.11
16) つらい	0.716	0.650	0.882	0.610	0.794	2.43	1.35
14) 泣きたい気分だ	0.706	0.583	0.867	0.589	0.782	2.23	1.31
9) 淋しい気分だ	0.588	0.592	0.839	0.547	0.720	2.55	1.35
11) 惨めな気分だ	0.633	0.527	0.778	0.504	0.641	2.18	1.26
12) 何ごとにも自信がない	0.530	0.639	0.760	0.485	0.654	2.74	1.33
10) 不安を感じる	0.485	0.607	0.759	0.454	0.626	3.02	1.38
15) 怖い気持ちだ	0.644	0.447	0.685	0.516	0.647	1.90	1.13
因子4 身体反応 (7項目 α=.889)							
2) 頭が重い	0.515	0.558	0.565	0.889	0.739	2.44	1.41
4) 頭がぐらぐらする	0.500	0.492	0.532	0.814	0.658	2.07	1.19
1) 頭痛がする	0.441	0.444	0.438	0.812	0.655	2.35	1.37
3) 身体が熱っぽい	0.558	0.438	0.494	0.765	0.622	1.96	1.11
6) 身体がだるい	0.477	0.546	0.504	0.657	0.576	2.88	1.44
7) 吐き気がする	0.606	0.383	0.444	0.612	0.541	1.60	0.89
5) お腹が痛い	0.430	0.442	0.441	0.609	0.416	2.40	1.38
負荷量の平方和	12.194	10.993	12.343	10.406			
因子間相関行列	因子1						
		因子2					
			因子3				
				因子4			
					共通性		
						平均値	標準偏差

はなかった。

(4) 学校享受感と友だちへの好意度と教師への好意度との関係

学校享受感得点と友だちへの好意度得点と教師への好意度得点の相関係数を算出し、相互の関係を検討した。それぞれの変数間に $p < .01$ で有意な関係が示された (表13参照)。

学校享受感を従属変数、友だちへの好意度と教師への好意度を独立変数として重回帰分析を行った。調整済みの R^2 は.310であり、友だちへの好意度 ($\beta = .466$)、教師への好意度 ($\beta = .228$) とともに学校享受度と $p < .001$ で有意に関連していることが示された。

2. ストレス反応と、部・サークル活動

への参加度(高・低)、友だちへの好意度(高・低)、教師への好意度(高・低)、学校享受感(高・低)、性差(男・女)

ストレス反応尺度 (38項目) は、因子分析 (主因子法 プロマックス回転) の結果、共通性が.300以下、抽出した4因子のいずれでも因子負荷量が.400以下の質問項目 (7項目) を削除し、31項目を分析の対象とした (表10参照)。

因子1「不機嫌・怒り」(9項目 $\alpha = .930$)、因子2「無気力」(7項目 $\alpha = .916$)、因子3「抑うつ・不安」(8項目 $\alpha = .939$)、因子4「身体反応」(7項目 $\alpha = .889$) を抽出し、因子ごと1項目あたりの平均得点に換算し、結果の分析の測度とした。4つの因子

の信頼性係数(α)は、0.889~0.939であり、それぞれの因子の内的整合性は保証された。

(1) ストレス反応尺度の因子別平均得点

ストレス反応の因子ごとの平均得点は、対応のある2要因のt検定の結果、因子2「無気力」(2.70) > 因子3「抑うつ・不安」(2.42) > 因子4「身体反応」(2.24) > 因子1「不機嫌・怒り」(2.09)の関係が $p < .01$ で有意であった(表11参照)。

学生のストレス反応は、何もする気のしない「無気力」や悲しい惨めな気分になる「抑うつ・不安」型が多く、表出されない内向的な形を採っていること示している。

部・サークルの所属別に因子ごとのストレス反応得点を分析した。いずれの因子でも所属系間に有意差はなかったが、部・サークルへの所属(2.37 SD1.08) < 無所属群(2.68 SD1.13)の関係が $0.5 < p < .10$ で有意に近い値であった。

	頻度	平均値	標準偏差
因子1 不機嫌・怒り	292	2.09	0.98
因子2 無気力	291	2.70	1.11
因子3 抑うつ	291	2.42	1.09
因子4 身体反応	289	2.24	0.98

(2) 友だちへの好意度(高・低)とストレス反応の関係

友だちへの好意度を中央値(4.50)で低群と高群に2分割し、因子ごとにストレス反応を検討した(表12参照)。

因子1から因子4のいずれのストレス反応

得点にも、低群>高群の関係が $p < .001$ で有意に示された。この結果は、友だちへの好意度が低いことは、ストレス反応のすべての因子に影響を及ぼし、ストレス反応を高める大きな要因となっていることを示唆している。

(3) 教師への好意度(高・低)とストレス反応との関係

教師への好意度を中央値(3.50)で低群と高群に2分割し、因子ごとにストレス反応を検討した(表12参照)。いずれの因子のストレス反応得点に、低群>高群の関係が $p < .05$ で有意であった。したがって、教師への好意度もストレス反応と密接に関連しているといえる。

(4) 学校享受感(高・低)とストレス反応との関係

学校享受感を中央値(3.67)で低群と高群に2分割し、因子ごとにストレス反応を検討した(表12参照)。いずれの因子のストレス反応得点に、低群>高群の関係が $p < .001$ で有意であった。したがって、学校享受感が低いことは、ストレス反応を高めることに繋がることを示唆している。

3. ストレス反応と友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感との関係

ストレス反応と友だちへの好意度と教師への好意度と学校享受感の相関関係マトリックスを示した。ストレス反応は、友だちへの好意度と教師への好意度と学校享受感と有意

	友だちへの好意度 (中央値:4.50)		教師への好意度 (中央値:3.50)		学校享受感(中央値:3.67)		
	平均値(SD)	t・値(有意性)	平均値(SD)	t・値(有意性)	平均値(SD)	t・値(有意性)	
因子1 不機嫌・怒り	低群	2.40(1.01)	4.830(**)	2.26(1.01)	2.902(**)	2.41(0.97)	5.551(**)
	高群	1.86(0.90)		1.93(0.94)		1.80(0.91)	
因子2 無気力	低群	2.94(1.03)	3.235(**)	2.92(1.09)	3.204(**)	2.99(1.06)	4.157(**)
	高群	2.53(1.14)		2.50(1.11)		2.46(1.11)	
因子3 抑うつ・不安	低群	2.66(1.11)	3.289(**)	2.56(1.10)	2.135(**)	2.72(1.06)	4.446(**)
	高群	2.24(1.05)		2.29(1.07)		2.16(1.06)	
因子4 身体反応	低群	2.50(1.02)	3.982(**)	2.36(0.96)	1.954(*)	2.49(0.98)	4.191(**)
	高群	2.05(0.91)		2.13(0.99)		2.02(0.94)	

(*): $p < .05$ (**) : $p < .01$

($p < .001$) に負の相関関係にあった (表13参照)。

次に、ストレス反応を従属変数、友だちへの好意度と教師への好意度と学校享受感を独立変数として重回帰分析 (ステップワイズ法) を行い、ストレス反応と学校享受感とが有意 ($\beta = -.366$, $p < .001$, 調整済み $R^2 = .131$) に関連していた。さらに、学校享受感を従属変数とし、友だちへの好意度と教師への好意度を独立変数として重回帰分析を実施し関連性を検討したところ、学校享受感と友だちへの好意度 ($\beta = .466$)、学校享受感と教師への好意度 ($\beta = .228$)、のいずれにも有意な関係 ($p < .001$, 調整済み $R^2 = .310$) が確認された。

したがって、友だちへの好意度と教師への好意度が学校享受感と関連し、さらに、学校享受感はストレス反応とマイナスに関連しているといえる (図1参照)。

	ストレス反応	友だちへの好意度	教師への好意度
ストレス反応			
友だちへの好意度	-.251 (**)		
教師への好意度	-.199 (**)	.214 (**)	
学校享受感	-.366 (**)	.515 (**)	.328 (**)
(*) : $p < .001$ (両側)			

結論

大学の部・サークルへの所属系列を、体育会、文化会、体育会系、文化会系に分けて、友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感及びストレス反応についてアンケート調

査を実施し結果の分析を行った。

1. 部・サークルの所属と活動への参加度が、友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感に及ぼす効果

(1) 部・サークルの所属系列および参加度と友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感との関係

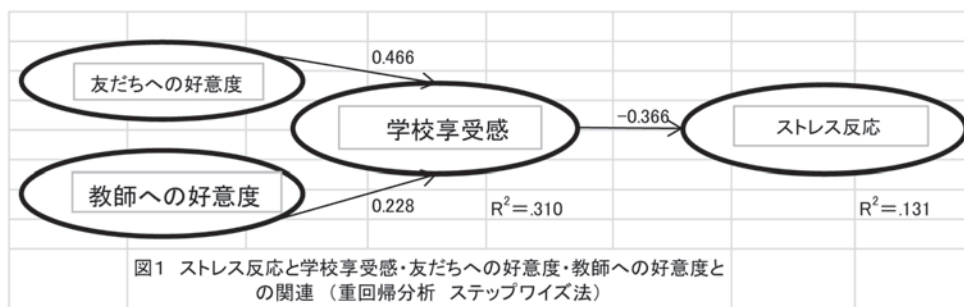
部・サークルへの所属系列を独立変数、3つの変数 (友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感) を従属変数として分析した結果、いずれの従属変数にも所属系列間に有意差はなかった。しかしながら、無所属群は、部・サークルの所属群に比べ、友だちへの好意度と学校享受度で有意に低かった。学校享受度について、部活・サークルへの参加度から分析した結果、参加度低群は高群に比べ有意に低い得点であった。

したがって、部・サークルへの所属と活動への参加度は、学校享受感と密接に関連している。さらに、無所属と同様に参加度の低い学生は、学校生活への満足度も低く、学校への適応度も低いことが推察される。

性差は、友だちへの好意度についてのみ、女性の方が男性より有意に高い値を示していた。この結果は、松尾ら (2003) の結果を一部支持するものであった。

(2) 学校享受感と友だちへの好意度および教師への好意度との関係

学校享受感と友だちへの好意度と教師への好意度の3変数の相関係数は、いずれも強い



正の有意の相関を示していた。

学校享受感を従属変数、友だちへの好意度と教師への好意度を独立変数として重回帰分析した結果、友だちへの好意度と教師への好意度は学校享受感と有意に関連しており、友だちへの好意度の方がより強く学校享受感と関連していることが示された。学校享受感は、友だちとの好ましい人間関係が大きく影響しているといえよう。

2. ストレス反応におよぼす部・サークルの所属系列と活動への参加度、友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感の効果

ストレス反応尺度を因子分析した結果、「不機嫌・怒り」「無気力」「抑うつ・不安」「身体反応」の4因子が抽出された。これは、三浦ら（1995）と松尾ら（2003）の結果と一致するものであった。また、ストレス反応の高さは、無気力>抑うつ・不安>身体反応>不機嫌・怒りの関係が有意に示された。「無気力」「抑うつ・不安」反応の相対的に高い結果は、内向的に考える傾向の高い現代の大学生の特徴であるともいえる。

（1）ストレス反応と部・サークルの所属および活動への参加度との関連

部・サークルの所属系列ごとに4因子について分析した結果、いずれの因子にも所属系列間に有意差は認められなかった。また、活動の参加度（高群・低群）にも有意差はなかった。したがって、所属系列と活動への参加度はストレス反応に関連していないと考える。

しかしながら、「抑うつ・不安」反応に、部・サークルの無所属が所属群に比べ低い傾向が示された。つまり、無所属の学生は、「抑うつ・不安」を抱きやすいともいえる。

（2）ストレス反応と友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感との関連

友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感のそれぞれの中央値で高群と低群に分割し、ストレス反応の4因子について分析し

た結果ところ、上記の3変数すべてで、ストレス反応の4因子すべてに、低群の方が高群より有意に高いストレス反応得点を示していた。この結果は、低群の学生はすべてのストレスに敏感に反応しやすいことを示唆している。また、ストレス反応の4つの因子に有意な性差は認められなかった。

3. ストレス反応と友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感との関係

ストレス反応と、友だちへの好意度、教師への好意度、学校享受感との関係は、強い負の相関が有意に認められた。重回帰分析の結果、友だちへの好意度と教師への好意度は学校享受感と密接に関連しており、学校享受感がストレス反応と強い負の関連性を示していることが確認された。

したがって、良好な友人との関係認知（友だちへの好意度）と良好な教師との関係認知（教師への好意度）が、学校生活を楽しく感じる（学校享受感）の度合いを高め、楽しい学校生活（学校享受度）が、ストレス反応を低減させていると考えられる。

引用文献

- 新井洋輔・松井 豊 2003 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向 筑波大学心理学研究, 26, 95-105.
- 古市祐一 1991 小・中学生の学校嫌いの感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 松尾美耶・佐藤公代 2003 大学生の対人関係認知およびストレス反応と学校享受感との関連 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 49, 2, 49-55.
- 三浦正江・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応の継時的変化 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 555.
- 橋爪裕子・高木 修 1995 クラブ・サー

自由研究

クルへの加入から離脱までの意思決定過程
の研究 日本社会心理学会第36回大会発
表論文集 86-87.

煙山千尋 (2013) スポーツ選手用ストレス
反応尺度の開発 岐阜聖徳学園大学紀要
教育学部編, 52, 31-38.

本研究は, 第2筆者, 田辺千草 (2012)
の卒業論文の資料にさらなる資料を加えて,
第1筆者, 藤原正光が再分析したものである。